

## 企画立案と若手人材の活用—邦楽デモンストレーションと舞台のしつらえ—

2月7日(木)15:30~18:00 カルチャー棟 小ホール

[モデレーター兼講師] 葛西聖司 (古典芸能解説者)  
[講師] 味見純 (東京藝術大学音楽学部邦楽科准教授 東音会唄方)  
[講師] 杵屋勝三郎 (一般財団法人杵勝会八世家元)  
[講師] 福原寛 (福原流笛方)  
[講師] 松永忠次郎 (松永流唄方)  
[モデレーター] 柴田英杞 (公益社団法人全国公立文化施設協会 アドバイザー)

○柴田氏 皆さん、こんにちは。研修会も2日目後半になりまして、皆さん、お疲れ出ておられませんか。

今日は「企画立案と若手人材の活用」というテーマで、長唄という邦楽のジャンルを皆さんにご披露させていただきたいと思っております。

まず、本編に入ります前にちょっと私のほうから若干かた目なお話をさせていただきます。それで本編のほうに入っていきたいと思っております。お手元に資料が渡っているかと思えます。その次第にのっとしてお話をさせていただきたいと思えます。約25分ぐらいお時間を頂戴したいと思います。

研修ノートは16ページでありまして、講師の先生方、それからスタッフの皆さん、ご出演者の皆さんのプロフィールはそこに掲載してございますので、ご紹介を省かせていただきたいと思います。

まず、本講座の目的なんですけれども、皆さん、企画立案をされるときには大変ご苦労されているかなと思います。私も苦労しております。限りある財源でどのように企画立案を行っていくのか、事業計画を策定する際のメリハリをどうするのか、それから地域住民のニーズと企画立案者の思いをどのように調整していくのか、質の高い事業を企画するとともに、将来のある若手人材にどのような活躍の場を提供するのか、企画を立案する際の悩みは尽きません。本日は、単なる企画立案ではありません。希少な企画、それをあえて行っていくことの重要性を説いた講座を企画いたしました。本日のキーワードは「希少な企画立案」、それから「若手の活用」。今日は長唄を用いますので、「江戸文化の象徴と言える長唄」、これらがキーワードになります。

本編の講座の内容は、公文協歌舞伎でおなじみの葛西聖司先生の司会進行により進めていきますけれども、まずは劇場音楽堂における自主事業の状況とか伝統芸能の普及、企画立案プロセスについて少しお話しさせていただきます。

企画立案に係るジャンルの偏りです。

公文協が発行しております平成28年度劇場音楽堂等の活動状況に関する調査から、ジャンル別平

均事業件数を見てみます。これを見てみますと、一番多いのが音楽ですね、年間8本。それから、演劇が3本、舞踊が2.2本、伝統芸能が2.3本、演芸、主に落語ですけれども、これが2.1本となっています。音楽は約70%の実施状況ですね。次いで、演劇、伝統芸能と舞踊と続いています。

伝統芸能の内訳については、狂言、能、歌舞伎、文楽の順で最も多いです。日本舞踊や邦楽の実施は極めて少ない現状がございます。近年では、落語ブームというところもありまして、落語を実施する劇場が多くなっているという現状です。

次に、文化政策から見た若手人材の支援というところですが、文化政策の観点から見ますと、若手人材の活用についてはジャンルを問わずですけれども、2002年に第1次基本方針というものができまして、この第1次基本方針から、昨年閣議決定されました文化芸術推進基本計画に至るまで、ジャンルを問わず、担い手の人材に活躍の場を提供する必要があるということを説いています。基本計画の目標4というところでは、文化力向上に向けてあらゆる人々が文化芸術になれ親しめるように、その担い手の育成や創造活動の場に向けた取り組みに努めることが重要であるというような記述がございます。

ちょっとここで視点を変えまして、拠点を持たない伝統芸能の普及ということで、伝統芸能の普及については先ほども申し上げましたとおり、事業実施の状況では日本舞踊や邦楽の事業が全国的に見て希少です。圧倒的に少ないということですね。能、狂言とか歌舞伎などの伝統芸能と比べると邦楽、邦楽のジャンルは幾つかあるんですけれども、箏曲でありますとか尺八、長唄、常磐津、清元などが邦楽というふうになっているんですけれども、そのジャンルの活動の拠点が明確でない現状があります。例えば皆さんもご存じだと思いますけれども、能と狂言には能楽堂がありますね。歌舞伎には歌舞伎座とか国立劇場とか南座とかあります。地域の芝居小屋もございます。文楽には国立文楽劇場、大衆芸能には演芸場、組踊には国立劇場おきなわがあります。日本舞踊や邦楽について、明確なコンセプトを持って年間実施し続けている劇場もありますね。例えば国立小劇場、それから紀尾井の小ホールというのがあります、四ツ谷にありますけれども。あと、石川県立音楽堂の邦楽ホールなどで明確なコンセプトを持って実施しておりますが、数少ないというのが現状であります。

企画立案のプロセスなんですけれども、企画立案に当たって、あえて取り組まなければ途絶えてしまうジャンルへの力点というのがもう少し必要なのではないかとこのように私は常々考えております。ただし、苦労は大変伴います。文化事業で採算をとるということは非常に難しいですよね。いろいろなその企画を立案しても全て赤字ベースで、なかなかキャパシティーを全て埋めるということは厳しいわけなんですけれども、ここで不採算ベースの事業をあえて実施する意欲と計画性、それから希少な企画をあえて取り組むという職員の挑戦力を皆さんに期待したいなと思っていま

す。

ここでちょっと事例をご紹介しますんですが、別紙でお渡しした資料でA4の横長のものをごらんいただきたいんです。

皆さんも多分、現状と課題ということを企画立案をする上で実施されていらっしゃるかと思いますが、ちょっとここで私の経験談をお話しさせていただきます。

私は演劇が専門なんです。ですけれども、公立の劇場に勤務するようになってからは、あえて希少性の高い伝統芸能に取り組むことに挑戦し続けています。鳥取でもそうでしたし、滋賀県、出雲市等々で果敢に挑戦しています。この資料は、鳥取県の財団で伝統芸能の事業を実施していました、その事業が停滞してしまったんですね。いつもしっかり事業を計画して、実施して、宣伝もし、チケットも販売しということを繰り返して手抜きなく実施しているんですが、お客さんの増加も余り望めない。それから、何か地域の住民の方々のそのニーズに答えていないんじゃないかというそういう疑問とか不安とかというものがふつふつと湧いてきていた時期に、そのようなときなどのような企画を提供したらよいのか、どのような観客を発掘していけばよいのかということを経験職員とともに考える中で、この資料は職員が作成した生の原稿です。今日は作成した職員にお断りをして、皆さんに配布させていただいていますが、そのときの鳥取県の財団の古典芸能を実施するときに現状で申しますと、3つぐらいちょっと課題がありまして、何で伝統芸能、古典芸能が県民に浸透しないのかとその理由を考えてみようということで、教育の場での取り組みがどうなっているのか、日常生活との乖離がどうなっているのか、演じる側の意識はどうかというこの3点から整理をいたしました。

教育の場での取り組みとしては、若年者が学校等で古典芸能に触れる機会が少ないと。箏曲が平成14年から中学校の音楽の授業に取り入れられてからは、多少は古典に触れる機会というのも増加していると思うんですけれども、それでも少ないと。西洋音楽に比べるとかなり少ないと。

それから、日常生活との乖離ですね。生活が洋式化しております。古典芸能が描く世界が身近ではないわけですね。お着物も着ませんし、特別なときでないを着ませんですね。それから、一般県民が古典芸能に触れる機会が少ない。音楽などで西洋中心、日本の古典芸能が異文化となっているのではないかというこれは非常に興味深い指摘でありまして、日本人でありながら日本文化が何か異文化になっちゃっているんじゃないのかという指摘を職員がするわけです。

それから、演じる側の意識としては、流派や稽古の枠内に活動がとどまっておって、広く一般に鑑賞してもらうための工夫がないということでもあります。この流派性の問題というのがあります。

それで、現在の取り組みを調べまして、取り組みの課題というものを整理をしました。教育の場での取り組みということで、学校教育の中で地元のアーティストを学校に派遣しているという宅配

便事業がありまして、その中で興味を持った子どもに対するフォローがないのではないかと。それから、子どもに教える際の講習方法が指導方法とか伝達方法ですけれども、そういうものが確立できていないのではないかと、教える側の問題があるのではないかとという問題提起がなされました。

次に、日常生活との乖離については、古典芸能に興味を持ってもらうために、背景とか歴史といった基本的な知識の普及というのがこれは絶対必要であると。解説しないともうわからない状況になっていると。

演じる側の意識としては、ジャンルを超える活動を行う演奏家は一部にとどまっているという。こういうふうな取り組みへの課題が認められまして、それでその当時、これからどうして行こうかということで、今回の取り組みというところでは、子どもに対する古典芸能のワークショップをどんどん増やしていこうという試み、それからワークショップの講師を育成していかないと演奏はかなり非常にクオリティーが高い演奏をしても、その指導方法とか伝える技術であるとかそういうふうなものがやっぱり乏しいとなかなか学校教育の中では伝え切ることができないのではないかとということで、その講師の育成というところに非常に資金を投資いたしました。

それから、日常生活との乖離ということで行くと、異文化になってしまっているというような指摘でありましたので、これは日常生活の中で本当に身近に感じられるような場所で、例えば地元のお祭りなんかと一緒に参加してみるとか、無料の何かコンサートを実施してみるとか、日常生活の中で気軽に触れるような機会をどんどんつくっていく、敷居を低くしてどんどんつくっていくということが必要なんじゃないのかねというそういう取り組みで、古典芸能文化講座の開催というものも提案がされました。

それから、演じる側の意識としては、ここに幾つか記述されているものについては既存の事業であります。その既存の事業をもう少し改良して、一般の方々に普及できるようなそういう催し物をつくっていくと同時に、やっぱり演じる側の意識の改革もしていくというようなプログラムをつくっていきまして、最終的には古典芸能祭みたいなようなものを毎年毎年、地元の文化活動者の方々に参加していただくと同時に、中央から非常にすぐれた演奏家の方々をお招きして、芸能の神髄を味わっていただくというそういうことをしたらどうかということで、徐々に平成17年あたりぐらいから古典芸能を積極的に行っていくというそういう状況をつくっていききました。ただ単にほっておいても、そういう機運というのは醸成されないもので、あえて公益性が高い事業を実施して、県民とか地域住民の方々に提供する機会をつくっていくのが私たちの仕事ではないかということに至ったわけです。

それで、希少な分野の企画立案です。

希少な分野の企画立案の留意点として、私の経験した中で3つぐらいちょっと留意点を申し上げ

たいと思います。

まずは、鑑賞機会の創出であります。せっかく日本に生まれて育って、今まで過ごしてきたわけですから、日本に生まれて一度も日本の音楽を、日本の音を聴いたことがないという子どもたちや大人たちがいないようにしようということです。ですから、あえて鑑賞の機会を創出していこうというメッセージ。

それから、2番目ですけれども、希少な企画を実施するための成功の三本柱があります。これ絶対欠かしてはいけないことなんですけど、1つは、そういうリスクをしょってでもこの企画を推進していくんだというチャレンジングで意欲的な職員の存在というのがまず欠かせないですね。ここを外してしまったら、もう企画立案なんかできなくなってしまう。そういうチャレンジングで意欲的な職員が必要。

それから、本編のところで葛西聖司さんにご登壇いただきます。葛西先生は公文協歌舞伎でおなじみで、皆さんもよくご存じかと思いますが、葛西先生のようなジャンルと観客を結んでくださる解説者、司会進行の方、これがとても重要です。私は古典芸能のプロデュースを幾つかさせてもらいましたけれども、必ず葛西先生に司会進行をお願いして、古典芸能を観客の皆さんにわかりやすく親しみやすくお届けしていただいています。非常にありがたいと感謝しているわけなんですけれども、葛西先生がお話をし出しますと、冷たい客席がものすごく温かくなるんですよ。それで、何かお客さんのその熱気を引き出してくれるそういう状況になるんですね。本当に不思議な力が働きます。そういう方が絶対必要なんです。2番目には、ジャンルとお客様をつなぐつなぎ手が必要だということになります。

3番目なんですけど、これはもう優秀な演奏家、この存在は欠かせません。私は特に最近では、将来有望な有能な若手の存在を意識しています。これからどんどん少子高齢化が進んでいまして、若手人材も本当に少なくなっていくというような状況を迎えます。それとともに、お客さんも減少していくわけなんです。ですから、何とか若手の方に頑張ってもらって機会を設けていきたいというふうに思っています。

この3つ、外してはいけないことだと思っています。例えば単独実施が難しい場合、不採算の事業をあえてしていくわけですから、公文協歌舞伎の前後に歌舞伎舞踊の出し物とあわせた邦楽公演を行ってみてはいかがかと。ことし中央コースで歌舞伎が回るときには「奴道成寺」というものが演目に上がっていますので、それは邦楽でもしっかり聴くことができる曲目でありますので、そういう形で観客の古典芸能への関心を深めるに当たって、抱き合わせの公演の企画も実現可能かと思っています。

最後に、2点申し上げたいことがあるんですけれども、1点目は、不易流行という言葉でありま

す。この言葉は、晩年の松尾芭蕉が芭蕉俳諧の本質を捉えるための概念として問題提起したものであるということです。芭蕉によりますと、不易というのとは時代の新古を超越して不変なるもののことを言います。一方、流行というのとは、その時々時代に依りて変化していくものというふうには考えられています。これ一見、相対する言葉のように思えるのですが、奥深いところで一致しているというふうには芭蕉は説きます。私流に解釈いたしますと、不易というのとは、先人の偉業に敬意を払って伝承としてそのまま世の人々に伝えていくことであるというふうには思っています。流行というのとは、新しさを求めて変化を重ねていくことで伝統は革新の連鎖であるというふうには捉えています。当代のアーティストやプロデューサーによって改良されて、現代人もいろいろ変化していきまますよね。ライフスタイルの変化であるとか、価値観とかですね、多様化しています。そういうライフスタイルや価値観に受け入れられる芸術文化を育むということではないかというふうには私は思うわけです。本日の演奏は、「二人椀久」で不易という部分を、「抄曲集」では流行性をご堪能いただきたいと思っております。

古典芸能の希少な企画、この古典芸能に限らずぜひ皆さんにおかれましては、それ以外のジャンルでも結構です、あえてこういう希少な企画を実施していただきたい、勇気を持っていただきたい。指定管理者制度が導入されて、やはり採算ラインというのを皆さん重要視して企画立案をしていらっしゃると思います。それはそれで実施していかなければいけないことでもありますので、それはそれでよろしいと思うのですが、でも一方で、やっぱり希少な企画をどうやって地域住民の方々にバランスよく企画を提供していくかということは、非常に企画者としては重要なことだと思っております。地域住民の方々に多様なジャンルの企画立案を計画していただきまして、地域住民の感性というものを刺激し続けていただきたいなど、本当に節に願っております。

私の前説は以上でありまして、いよいよ本編をスタートいたします。これからは葛西先生の進行によりまして、江戸文化の象徴、長唄の世界に入っていきます。若手人材の指導に当たる先生方のお話、それから現在、大学等々で長唄を勉強している清響会の皆さんによる演奏です。清響会の皆さんは、お手元にチラシが配布されているかと思いますが、昨年、本格的なプロ演奏家としてデビューを果たしました。お手元にあるチラシのコピーがメンバーの顔ぶれです。

それでは、これから本編の講座を始めていきたいと思っております。

葛西先生、どちらにいらっしゃいますでしょうか。

#### ○葛西氏 (客席から登場)

皆さん、こんにちは。葛西です。

今日皆さんここにいらっしゃる方は多様なお立場の方々に、公文協施設の方もいれば、長唄関係の方もいれば、お役所の方もいるでしょうけれども、アンケート。歌舞伎では見たことあつ

たり、テレビやラジオで聴いているけど、生の純粋な長唄の演奏を初めて聴く人、拍手、どうぞ。

ありがとうございます。78人。そういう方のための今日は研修だと思ってください。つまり、長唄知っているよ、歌舞伎もよく見ているよという方はちょっとお待ちください。むしろ皆さん方は企画立案して、そしてこれはエンターテイメントなんです、日本人のね。その中に皆さんが興味を持つとか、どこかなというのを感じていただきたいからこそ、初めての方のその感覚が大切です。演奏会の会場にお客様と同じ身を置いたときに、どう体で感じるかというところの今日は研修なんですよ。長唄ってこれです、ああそう、参考になりましたよ、よかったですね、そうじゃない。やった意味がないんですね。

今日これから演奏してくださる清響会の皆さんの演奏をこれから聴いていただきます。柴田さんに命じられたのは「二人椀久」の説明してくださいねということですが、「二人椀久」はものすごく長い作品で、日本舞踊、歌舞伎舞踊になっているんですね。これを皆さんお手元に歌詞があります。歌詞見ようっていったって小さい歌詞になっているから、見てもわからないですよ。大体、日本語が難しくなっているわけですね。「二人椀久」自体がもうわからない。

江戸時代、あるいは明治ぐらまで「二人椀久」の椀久といたら知られている人で、椀屋久兵衛とか椀屋久右衛門、これが略称で椀久と言われて、大阪に住んでいた人なんですね。この大阪の豪商です、椀屋さんというので、おわんを売っていた、塗り物とか陶器を売っていたかどうかはわかりませんが、それで豪商ということは単なるお茶わん屋さんじゃなかった。つまり、茶道なんかで使う高級な美術品なんかを扱っていたんじゃないかなと思っていただくと、大阪の豪商、椀屋久右衛門、椀屋久兵衛というイメージが湧くかもわかりません。

お金がすごくありました。江戸よりも大阪は商人のまちですから、とてもお金を持っている人がいた。そのお金を持っている人はやっぱりふだんいろんなつき合いがありますけど、一番好きなのがクラブ活動です、夜の活動ですよ、皆さん。わかった人はわかる、クラブ活動やっているでしょう、きっと。ただ、大阪は繁華なまちですから高級なクラブがいっぱいあるところ、新町というところですね。その料理茶屋があって、きれいなお姉さんたちがいっぱいいるところ、そこで遊ぶのが大好きだったんですが、そこでもランクがあります。超一級のホステスさん、松山という人に恋をしちゃった、美人だしそれから演奏するのもうまいし、いろんな芸事も得意な人ね、この松山太夫という人に恋をした椀屋久右衛門、これ実説なんですけど、余りにもお金を使い過ぎちゃった。お座敷遊びというものはもう湯水のようにお金を使うんですよ、だからもてるんです、旦那さんはね。

だから、昔の人は関係なくお金を使って、余り使い過ぎたものだから、お座敷で豆まきだといって小判をまき散らしたりとかそんなふうにして節分にお金を使ったりするので、親戚の人たちがこ

いつは危ないというので、座敷牢といたって牢屋じゃないんだけど、一間に閉じ込めちゃったわけね。松山太夫に会えないようにしたら気がふれちゃったんです。気がふれたんだけど、恋しい松山に会いたいなとってこっそり閉じ込められている家から抜け出して、夜の道を歩いていく。すると、松の木が1本立っている。ただ1本木が立っている。歌舞伎ですから、暗い場面の中に松の木が1本立っているところに、ふらふらとさまよい出てきた椀久が「あ、松山だ」とってそこで夢を見る。それはかつてお金を持って遊んでいるころ、松山と一緒に遊んだ楽しいお座敷遊び、それを再現する音楽が長唄なんですね。

でも、長唄のこの歌舞伎のドラマを全部見たりすると何十分もかかるんですけど、今日はそれをコンパクトにしました。歌詞読んでみてもよくわからない。なぜ、それは全部そのときにはやった流行歌が流れるんだと思っていただけと、そんなものなのかと思っていただきます。歌詞読んだってよくわからない言葉がいっぱいありますが、よく聴いてください、まずは。聴くとところどころわかるんです。なぜ、日本語なんです。皆さん、外国の芸能じゃないんですね。よく聞けばわかるんです。だから、字は見ないんです。字を見ながら聴いたら、字の確認作業でしかない。いいですか、長唄という音楽を楽しんだから、音楽の中にどっぷり体を漬けてみてください。すると、三味線ってこんな音だったの、お囃子ってこんな音だったの、長唄何か歌っているけれど、何だろうな。何だろうなと思って耳を澄まそうとすると、皆さん目を閉じますね。目を閉じてはいけません。目を閉じるとそのままになってしまいます。あははという方が一番そうなります。いいですか、目を閉じてよく聞こうとしちゃだめ。目はしっかりあけてください。閉じるところは口なんです。いいですか、目を閉じて口をあけると、よだれしか出てきません。よろしいですね。

そして、耳をそばだてると、日本語ですから入ってきます。今のが合図なんです。ちょんちょんと手を打っていますね。これから始まりますよというんです。

目をあけて口を閉じて、耳をそばだてても絶対眠くなります。なぜ、いいからなんです、演奏が。心地よいから眠くなるんです。眠くなる感触を楽しみながらそれをこらえてください。どうやったらこらえられるか、背中を起こすんです。

皆さん、お客さんの感覚で聴いていただくんですけど、今日は長唄の体験ですから、ここがとていいところだから眠くなるなというところを体験するんだけど、目はしっかり研修ですからあけていてください。閉じた人、後で採点しておきますのでね、各地に報告いたします。こんなふうに眠くなるんだ、こういう心地よさをみんな味わっているんだと思ってしっかり聴く。すると、言葉がちょこちょこ入ってきて、何となく楽しそうだなと、例えば薄い杯でお酒を飲もうよなんて、これ杯が出てくるのは椀屋という商売だから茶器の道具が出てきたり、あるいは大阪の物語になぜか江戸のあんまさんの言葉、「按摩、けん引き」なんて出てくる。よくわからない。あんまが



肩の臑が凝っているからそれをよく引いて、よくもむとかと何これ、当時はやった流行歌と思って聴き流していただければいい。

聴き流していても耳に入っている言葉が長唄の中のちょこっとした意味ですけれども、お座敷で遊んだ楽しいときの再現ドラマだと思って聴いていただくんですが、それよりも器楽曲です。三味線だけの演奏のところもあれば、こんなふうに演奏が変化していくのかな、どうやって弾いているんだろう。生の演奏を生で見るわけですから、演奏者の姿を見ることも大切です。皆さんの持っていた、あるいはかつて感じたイメージとは違う体験が今日はできると思います。なぜ、歌舞伎だったら舞踊をやっている人ばかり見ている、演奏の人見たことはない。でも、今日は見られるんですから、どうやって演奏しているかを見ることの研修だと思ってください。くれぐれも歌詞を見たら、そう言っているな、こんな作業は何もならないんです。せっかく来ているんですから、こうやって見てください。見ようとすると、舞台のほうから皆さんに飛び込んでいきます。

「二人椀久」の二人というのは松山と椀久のこの2人なんだけど、でも松山は夢の中の出来事で、いつしかまた消えていってしまう。かわいそうな椀久の人生を描いているんですけれども、これが豪商という一時大変豊かな暮らしをしていた、この男は入水自殺をして死んじゃうんですね。これは井原西鶴がそういう物語に書いてはいますけれども、昔いた実際の江戸の華やかな文化の中から生まれた音楽だと思ってお楽しみください。

「二人椀久」、さあ何分皆さんは耐えることができるでしょうか。お楽しみください。

(「二人椀久」演奏)

○葛西氏 清響会の皆さんによります「二人椀久」の一部を聴いていただきました。

では、アンケート。眠くなった人、はい、どうぞ。よかった、その体験が大切です。どこで眠くなったのかは後でご自身考えてください。この研修がきのうからくたびれた、いいや、きのう夜更かしして遊んだ、必ず理由があるはずです。

こんなこと、アナウンサーの研修のときも歌舞伎見て眠くなった。私はだから全部見てわかったとか思うなということを使うんですね。長唄も今日初めて皆さん聴いたわけだから、今日のこれで長唄知ったと思ったらいけません。1回で何もかも知ろうと思うの、これは厚かましいと言うんですね。いいですか、皆さん、これは初回の体験です。何て言っているかわからない、でも手を挙げた以外の方、あるいは初めての73人の方でも眠くならずにあそこは何だろう、ここは何であんなふうに演奏しているんだろう、観察をしてくださいと申し上げました。あれは何だろうなと思った人、今聞かないから安心して手を挙げて。あれは何だろう、何人かいらっしゃるでしょう。その後で専門の皆さんに答えていただきますから、どんなことでもいいんです、皆さんが疑問を持つことが大切なんですよ。だって、日本人で何もかもわかっているわけじゃないですよ、私だってわからない

し、今日見ながらあれは何だろうなと私思ったことがあるんですけどね、発見が必ずあります。

だから、曲を聴いている間にも、演奏の仕方にも皆さんがふだん体験する西洋音楽と大きな違いがありますよ、幾つも。楽譜がないです。それから、皆さん、すごい違和感感じたかもわからないけれども、日本人の正装です。全く日常生活とは違う衣装を皆さんね、それから全員正座しています。それから、楽器を皆さん持っていたけども、それ以外にもいろんな道具、あれは何だろうなと思ったことがあると思います。

では、お話にいきましょう。今日のゲストです。よろしく願いいたします。

○味見氏 長唄の唄方、唄を担当ふだんはしております。味見純と申します。

○杵屋氏 三味線方の杵屋勝三郎です。

○福原氏 私は囃子の中の笛をふだんは吹いております。福原寛と申します。

○松永氏 私は唄を歌っております松永忠次郎と申します。

○葛西氏 お願いいたします。

ではちょっと幕を上げていただいて、舞台のしつらえということですか。どうぞ、幕をあけてください。これが長唄の演奏の基本的な舞台です。勝三郎さん、屏風というのはどうしてあるんですか。

○杵屋氏 見た目と、あと音を前に反射させて、音をよく聴こえるように。

○葛西氏 反射板なんです、音響板なんです。だから、日本の芸能だから、屏風が当たり前というわけじゃない。皆さん、いろんな会館でも経験なさっているけど、屏風について何かおっしゃっていたね。

○味見氏 扱い。素手でさわったりすると、金が張ってあるものだと腐食してしまうので、手袋を使って。

○葛西氏 手袋をして扱ってほしいということなんですね。これは金の箔、銀の箔、裏は銀ですね。この扱い、上下、こういう道具も皆さんの会館に常設しているかもわかりませんが、やはり高価なものですし、この扱いは演奏者、結構見ているんですよ。ここの会館の人の扱いはちょっと粗いとか、管理がちょっとあれだと穴あけたりとかね。それはなぜか、大切な反響板だということを教えてください。

それから、皆さん、目に届くのは緋毛せん、勝三郎さん、この扱いは。

○杵屋氏 緋毛せんと毛せんはいろいろその曲調によって変えていくんですけど、毛せんは緋毛せん、あと紺毛せん。

○葛西氏 紺毛せん、紺色の毛せんもあります。どういうふうに使分けられるんですか。

○杵屋氏 曲調ですね。曲調とか場面の転換の雰囲気とか、それから今言いました屏風も金のほかに銀屏風、鳥の子、また場合によっては障子。

最近では、毛せんも緑色の毛せんとか茶色の毛せん、古典ですので、赤と紺がベーシックなんで

すけれども、そうじゃない斬新な毛せんを使う場合もあります。また、いろいろな方に描いてもらった絵をバックに演奏するときもあります。

○葛西氏 基本的にはこの金と裏の銀ですね。それと、紺毛せんと緋毛せん、これがあるとベースになりますし、あとはもう一つ、鳥の子という薄いクリーム色があると汎用性がききます。もちろん皆さんの会館帰って、傷んでいるなと思ったらそれ注意していただくと、意外に大道具があればお金がかからないということですよ。

毛せんもこれ今、段になっています。上が唄方、三味線、下がお囃子になっていますけれども、お囃子のほうで何か気になることありますか。

○福原氏 囃子方は前に楽器を置いている時間というのが結構あるんですね。ですので、やっぱり毛せんの幅ですとか……

○葛西氏 ここの幅ですね。ここに腰をおろすんですが、ここへの幅、これも考えたいし。

○福原氏 あと、その毛せんの下にこの場合は長座布団のようなものを敷いてあるんですけども、座る位置ですね。

○葛西氏 ここ少し高くなっています。これ長い座布団なので、綿が入っています。上にも少し皆さんがお尻をおろすところに置いてありますけれど。

○福原氏 これが結構厚さが微妙に体感に関係しまして、余り厚過ぎると、腰の座りが悪くなって演奏しづらいんですね。ですので、煎餅布団ぐらいの何か平たいものが非常に具合がいいということはありません。

○葛西氏 ペっちゃんこでも困るけれど、ふかふかでも困る。

ただ、皆さん、日本の伝統芸能でももちろん例えば浄瑠璃、文楽の太夫、三味線は大きな座布団、それから落語家の方も座布団は当然ですから、座布団出されたことがある人。これは出してもいいけれど、通常は座布団は敷かないということ、やりにくいんですね。これも知っているか知らないかで、そうだというふうに思っておいてください。こういう道具、基本的なものがそろえれば。それで、上に乗ってているのは、味見さん、あれ何ていうの、唄方の道具。

○味見氏 譜面台というか、見台と申しまして、木でできているもの。

○葛西氏 これは大体自分で。

○味見氏 自前でございますけれども、おそろいの見台を皆用意しまして、今回はこの見台でやろうと事前に打ち合わせまして、そろえるようにしております。

○葛西氏 会館にお願いする場合はありますか、譜面台みたいな。

○松永氏 いや、見台、譜面台は会館ではお願いしたことはありません。多分ないと思います。

○葛西氏 ないですね。これは自前で持っていらっしゃるということですね。

さっき言ったように、基本的には譜面台なるものは要らない。これも譜面台ではなくて、唄本を置くための台ですが、流儀によって違うんですね。

○松永氏 形が違ったりしますね。

○葛西氏 長唄もそうです。同じ三味線音楽でも、清元や常磐津や浄瑠璃とは全然また違うので、その楽しみもありますよね。

○松永氏 そうですね。

○葛西氏 これ白木以外にはどういうものがあるんですか。

○松永氏 白木のほかは、もうちょっとかたい桑だったりとかというのがありますね。

○葛西氏 漆を施したものもありますよね。

○松永氏 長唄はほとんどこの白木の……

○葛西氏 白木の無垢の材を使うということですね。

○松永氏 浄瑠璃系は塗ってありません。

○葛西氏 あそこに小さい木の何か台がありますが、あれは何ですか。

○松永氏 あれは正座いすですね。合曳と我々は呼んでおりますけれども、長時間、座っているとしびれてしまうので、それをしびれないようにというのと、あと多少ちょっと浮かすことによって、唄をいい姿勢にするという役目があります。

○葛西氏 皆さん、今日長唄をというので、チラシは見ていたけど、幕があいたら余りにも若い人たちでびっくりしたと思いますが、ほとんど20代前後でしょう。一番若い年齢は幾つぐらいですか。

○松永氏 17歳です。

○葛西氏 17歳です。一番上が23、4です。皆さん、長唄というとおじいさんおばあさんのイメージがあるでしょう。あいたら余りにも若いので、びっくりなさったと。これも一つ、勝三郎さん、狙い目？清響会の。

○杵屋氏 狙い目というか、僕らの仕事の中でやっぱり芸を継承させるということが使命の一つであって、なかなか今、若い人たちが邦楽に限らず日本のものやってくれるお子さんが少ないということ、ピアノとかヴァイオリンもちろんそれもいいんですけども、やっぱり日本のものを若いころからやってほしいという。それをこういう若い人たちがこういう舞台でちゃんと演奏しているというのを見ていただいて、日本の音楽をぜひやってほしいという願いから若い人たちの清響会、子どものオーケストラの子ども楽団というのを僕ら、もう一人同人が要るんですけども、今日は欠席のその5人で話し合って、とにかく経験をさせて、まだ粗い芸ですけどもということで結成させました。

○葛西氏 ここに並んでいる人たちはお師匠さんクラスです。ただ、若いなら未熟は未熟なりに舞台の経験

を積ませることが一つ、これが企画立案の参考になると思いますけれども、ビジュアル的にもみんなはっとする若さと美しさ。未熟というのは失礼な言い方ですけども、でも小さいころからお稽古していますから、私たちにはできないことをやる。それを見る観客が若いお客も関心持ってほしいというのも狙いの一つですね。

清響会というグループで活動しています。男性もいるんだ、女性もいるんだというふうにびっくりした人もいるかもわかりませんが、あえて男女混合チームですか。

○杵屋氏 男がやるものと、歌舞伎なんかはね、演奏は男しかできないという固定観念はあるんですけども、唄に関してはちょっとキーが違ったりする部分があるんですけども、三味線に関してはやっぱり女性でも男性でも一生懸命やっとうまくなろうという気持ちのある人はどんどんうまくなってきて、これから引き上げていって大きい舞台を踏んでいってもらいたいということを考えております。

○葛西氏 皆さん、歌舞伎の舞台は役者も男、演奏者も男ですが、忠次郎さん、この長唄の世界というのは、つまりお三味線も含めて女の人の役割というのはまちのお師匠さんは女性だったんですね。

○松永氏 そうですね、昔からそのように江戸時代から、女性はまちのお師匠さんというふうになっていましてね。

○葛西氏 女性たちをちゃんとやっぱり下支えがあって、もちろん芸者さんの楽器でもありますから女流がやることは何のおかしいこともない。そして、今、芸大も含めて三味線を稽古している人は男女ともにいるわけですから、能の世界も男女ともにいますから、そうやって学び合うということで清響会をつくりました。

じゃ、「長唄って何」という聞かれ方をすると思うんですよ、味見さん。「職業は何ですか」と子どものころ聞かれて、どう答えていたのか、子どものころに。「お父さんの職業は」とか。

○味見氏 私の場合でしょうか。私の父が三味線方だったので、そういうことでお金稼いでいるというのは何となくわかっていたんですけども、はたから見るととても不思議な仕事ではあると思うんですけども、サラリーマンのように勤め人ではないということで、何か自由な仕事のイメージはあると思うんですけども……

○葛西氏 いや、「友達から長唄って何」と聞かれたら、何て答えていたんですか。

○味見氏 歌舞伎の伴奏として発展した音楽で、最近では一般の人が演奏するようになって……

○葛西氏 勝三郎さん、長唄って何と。

○杵屋氏 その質問が一番困るんですよ。長唄って何という、はっきり言うと聴いてもらうのが一番わかりやすいんですけども、細かく言うと、今、味見さんが言ったように歌舞伎のバックの音楽が当時はずごくはやっぴやして、それが独立して三味線と唄、それにお囃子だけで演奏するということ

が始まりだと思えます。

父から聞いた話だと、唄というのは最初プロがいなくて、三味線弾きのプロが舞台上で歌ってくれる人に歌わせるために唄は見台があって本が見られると。三味線のプロが歌わせてあげて、その大店のご主人とかがそういう皆さん集めて、自分が唄を聴かせるというところからだんだん始まったという。

○葛西氏 歌舞伎に附属する音楽、これは基本的には江戸の長唄、江戸長唄はそういう流れできたんですけども、今日お聴きのように純正の演奏曲でもあるという。

今日は特にこの曲を選んだのはなぜですか。

○杵屋氏 「二人椀久」は長唄の中では本当に人気のある代表の、つまり皆さんがいずれは「二人椀久」をやりたいというような目指したい曲ですね。

○葛西氏 今日の清響会の皆さんにとってはハードルが高い曲なんです。それをあえてやらせたんですよ。

そして、それでも皆さん、お感じになったと思う。私は眠くなりますよと逆のことを言ったんですが、逆にわくわくした人、聴いていて。いらっしゃる、よかった。つまり、囃子ですよ、寛さん。これやっぱり聴くと、一瞬しんとして、笛の音色になったとき、寝るかなと私思ったけど、すぐその後囃子になってわくわくしてきた、私はね。

○福原氏 そうですね、ありがとうございます。

○葛西氏 寛さんはお囃子の代表として、つまり上の段が長唄、下はお囃子と言いますね。囃子連中。ちょっとお囃子の話を。

○福原氏 囃子、あるいは歌舞伎の関係では鳴物と言ったりもするんですが、囃子というのははやすという言葉どおり、唄と三味線を盛り立てるような役目があったりするんですが、使われている今出ていた楽器は後ほどご説明しますが、もともとは能楽で使っている楽器と同じもので、それを歌舞伎でも使うようになったということで、それ以外にもいろんな楽器を黒御簾という舞台の下手の……

○葛西氏 こっち側です。上手と下手です。黒御簾というのは、黒い板囲いにすだれがかかっている、そのすだれも黒っぽいので、黒御簾というので、姿は見えませんが、向こう側に何か人の気配がする。その中で。

○福原氏 演奏をしたりとか、たくさんの楽器を使っておりますが、今、唄とか三味線を盛り立てるといようなお話、そこが肝であったりもするんですけども、やはり最近はいろんな我々もお客様に対して見ていただく方法を模索しなきゃいけないということで、囃子だけの演奏もさせていただいたり……

○葛西氏 これもおもしろいんです。つまり創作曲とか囃子だけの楽器演奏、つまり歌詞を伴わないものの演奏会も実は若い方の人気を得ている。これも企画のヒントになるかもわかりませんね。あるいは洋楽器との共演も。

○福原氏 そういうものも最近ずっとこのところは結構いろんな方がなさっております、それも一つの導入口ということにはなると思うんですが。

○葛西氏 でも、本来はやはり古典のよさに返ってもらいたいというのが言外にしております。

そして、上は長唄、唄方、三味線、これは江戸時代。下はさっき言った能楽のお囃子から来たからそれよりも前にあった楽器群です。これは日本の古典楽器、さらに古いものですね。

でも、これと長唄がなぜ合うのか、それは三味線にあります。

○葛西氏 勝三郎さん、どうぞ。三味線の魅力を。パーツの説明。

○杵屋氏 三味線の楽器、上から天神と言ってねじが3つ。

○葛西氏 ここが天神というところ。

○杵屋氏 それで、さおがありまして、今ちょっとそれで……

○葛西氏 それ、さおというんです、ここね。

○杵屋氏 これはインドの紅木（コウキ）というかたい木でできているんです。

○葛西氏 紅の木。

○杵屋氏 そこの下の胴というところ、これが今、葛西さんおっしゃった太鼓の役割でもあり、また弦楽器の音を出す部分なんですけれども、この皮が黒い点が4つついているんですけれども、これ何かおわかりでしょうか。

○葛西氏 黒いぼちぼちがあります。これデザインじゃないんです。こういうものなんです。何でしょうか。

○杵屋氏 これは猫のおなかの部分の皮を使っています。

○葛西氏 だからぼちぼちは。わかりますよね、ぼちぼちなんです。猫なのにぼちなんです。

○杵屋氏 そこに糸が3本ありまして、そこを根緒という下のそこで引っかけて、そこに駒というこれもやっぱり象牙でできているんですが、それで浮かせて音を立てるということなので、糸が絹を織りあわせてウコンというカレーとかに使う……

○葛西氏 ウコン茶のウコンです。それで染めている。

○杵屋氏 染めています。ですので、糸が演奏中に切れることがありますし、バチは象牙で使っています。

○葛西氏 バチの薄さ見せてください。こんな薄いんです、先のところが。これが繰り返し言っています、象牙、それから駒が象牙というんですが、ここが大変なところなんです。

○杵屋氏 そうですね、皆さんご存じだと思います、象牙がなかなか一般的に流通しなくなってきているの

で、それにかわる素材もいろいろ出ているんですけど、やっぱりこの象牙というのが一番音としてはいい音が出るのと、あと猫の皮というのも動物愛護とかいろいろもろもろのことでなかなか使いにくくなってきているということで、その楽器自体がなかなかいい楽器がつくるものも職人も少なくなっていますし。

○葛西氏 このさおの紅木も少なくなっている、いろんな悪条件があるんですけど、皆さん、えっと思うけど、日本の伝統文化ですね。やっぱり象牙でなければ出せない音色が駒やそしてこの音締めのところ、さらにはこのバチにあるんだということですが、もうさっき演奏を聴いていただいたけど、ちょっと印象的な演奏をどうですか。

○杵屋氏 まず、この三味線という楽器自体が不完全楽器、要するにピアノみたいに音が必ず安定して出るというものではなくて、湿度とか温度とかによって、さっき演奏をごらんになってわかったと思うんですけども、弾きながらねじを調節して、もちろん転調と言ってキー自体を変えることがあるんです、曲の途中に。そういうものも含めて、とにかく基本の音が狂っちゃうと抑えるところ全部狂ってしまうので、その部分がすごく微妙な楽器で、必ず最初から最後まで音が合っているということはまずないので。

○葛西氏 後で皆さん、さっきの歌詞のところにも二上がりとか三下がりと書いてあるんですね。それが転調の言葉なんですね、2の糸、3の糸を変えるという。

それ以外に湿気があるとどうなっちゃうんですか。

○杵屋氏 下がってきます。

○葛西氏 緩んじゃう、下がるというのは糸が緩んでしまって音が下がる。だから、湿気に応じて締めることになるんですね。

○杵屋氏 だから、屋外で演奏するとき、特に夏場なんかは本当にどんどん糸が下がってきちゃって、もちろん皮にもよくないですね、湿気がありますと。本当に外で今、演奏する機会とかも増えているんですけど、なかなか外で演奏するというのには不適當な楽器です。

○葛西氏 皆さん、これも企画提案のときに野外でやったら派手で、マイクロホン使って多くのお客さんが来るだろう、それもいいけれども、実は演奏者にとっては大変なハンディキャップを背負うことになる。空調のあるところでやるのが日本の楽器というのは、後で実はさっき皆さんの中に何人か持ったクエスションの答えにもなりますが、湿気を与える、乾燥させるということを求められる楽器なんです。それが日本人のこの空気に合っている楽器だという、それを芝居小屋の中で演奏していて、響かせたということですね。大きく響かせるために、この打樂器的な音響効果を生かしてバチを使っています。

○杵屋氏 ちょっと音を出してみて。



(三味線実演)

このドーンとあと震える、振動する音というのがこれが邦楽の独特な……

(三味線実演)

震えているでしょう、ビビーンと。このビビーンが……

○杵屋氏 これがさわりと言いまして、1のところの溝のところ音で。

○葛西氏 このところが金があって1本外れて、これがこう何でこんな楽器つくったんだろうという、いわゆる不完全楽器の一つ、音が要するにきちっと決まらずに、ビビッと振動するような、これをさわるんです。だから、さわりというんです。そういうようなもので、日本人の微妙な1足す1は2という音楽じゃないものをつくっている。これが好まれた理由なんじゃないかな。

○杵屋氏 あと、やっぱり横を向いて演奏するという、要するに指揮者がいなくてそろうという。さっきも3人で、そしてもちろんお囃子もそうなんですけれども、楽団が全部がそろうというのが真ん中で弾いている人の息とかけ声です。音をずらすという演奏法もあるんですけれども、それ今、最後の椀久のところさっきあった清搔（すががき）という……

○葛西氏 清搔というんですけれどね、これがくるわの音楽。くるわがさあ開店しますよという、くるわの開店音楽を清搔というきれいな字を書きますよ、清らかに搔くという。

では、ここをやっていただきますよ。

(三味線実演)

○葛西氏 拍手。

たくさん、くるわといっても花魁だけじゃない。芸者さんが並んでいてこれを弾くんですね。それで、さあ開店しますよというにぎやかな音楽で清搔。これがあって、歌詞の中に「廓ざとは我が家なれば」というのはくるわに居続けているもてる男の言葉で、「さと」というのは廓（くるわ）と書いて「さと」と読むんですが、そういう意味になっているという、これが男心をそそる音ということですね。

ほかに。

○杵屋氏 あとは、三味線の楽器によっていろいろなものを表現したり、例えばそれが季節であったり、物であったりするんですけれども、わかりやすいので「佃の合方」という川の描写、隅田川ですね、隅田川の屋形船に乗っているその隅田川の描写をする奏法があるので、それもちょっと今、演奏してもらいます。

○葛西氏 江戸の文化は隅田川沿いに発達しました。向こう側、深川、そしてこちらは浅草、上野、そうした隅田川沿い、隅田川ですよという音がこの音なんです。

(三味線実演)

○葛西氏 私なんかこれ聴くと、川面に月の光がきらきらと反射していくような想像、つまり皆さん、想像しないといけないので、もう強制的に想像していただきたいわけだけど、想像しないと近寄れないですよ。

歌うほうとしてはどうですか、こういう音を聴くと。

○松永氏 そうですね、やっぱりいい雰囲気だと弾かれると、こちらもその気分に乗せられて歌うような気持ちになります。

○葛西氏 そして、今、指揮者はいないんだけど、勝三郎さん言っていましたね、息とそしてちょっとした合図、これが指揮者がいなくてもきちっとそろうのとぴたっととまる、これが不思議なんです、私。どうして。

○味見氏 海外行くと、それが一番びっくりされるんです。誰があのオーケストラを指揮しているんだと。お囃子も全部正面向いて、前を向いていて全部が一致する。これ日本人独特の僕は生まれながら持っている独特の間を感じる感性が日本人に合っているんだと思っているんですけれども。

○葛西氏 今日何回もあったでしょう、突然ぱっととまるわけ、あれだけにぎやかにやっているのに。それがずれないでとまるという不思議。これは説明できないんですね、演奏者も。つまり気持ちを全部そこに集中して合わせているから、楽譜どおりやっていないからなんでしょう。つまり生の演奏だから、さっき皆さんどきどきするというのはそれに合っていたというこのおもしろさです。

それから、やっぱり上の人とまた下の人を合わせなければいけない、合わせているわけじゃないんでしょう。

○味見氏 はい。狙いに行くと間の緊張感が死んでしまうので、よく師匠からも言われましたけれども、相手のそういう息合いとか思いみたいなものをおもんばかって感じて、それで自分もそこへ当てていくとか自分も出していくという、それがお互いに合っていくというか、そういう結果になるというふうな。だから、そういう演奏をしていくと間に緊張が生まれて非常にいいものになるというふうに。

○葛西氏 全国で私いろんな演奏会行って、何でこれ入ったのというと、お父さんやお母さんがやっていたジュニア、そうじゃない人、結構いるんです。こういう客席に座って、お母さんが無理やりに連れていった演奏会で聴いて、あれやりたいと思ったという子もいたりね。いろんな楽器ありますけれども。それから、テレビ見ていて、あれ長唄ってと言って入ったという子もいるし、だからどこでどう出会うかわからない、その出会うきっかけをつくるのは皆さんなんですよ。

長唄だけを応援しているわけじゃないですよ、日本の伝統音楽、非日常、決めてしまったらそれでおしまいですよ、忠次郎さん。皆さんやっぱり知ってほしいとうことでこういう清響会の活動もやっているわけだけでも、なかなか知られない苦労あるでしょう、わかってもらえないとか珍

しいですねとか。

○松永氏 やっぱり見られる機会というのが極端に少ないんですよ。特にテレビ番組なんかも今、邦楽はNHKのEテレしかほとんどないような状態ですから。

○葛西氏 何か特別なものにかえって押しやられてしまっている、ふれる機会がなければ余計に日常性がない。さっきの柴田先生がおっしゃっていたように、どうやってそこに植え込んでいくか。だから、子どもたちへの活動、勝三郎さん、中心になって皆さんがやっているんだけど、今度の勝三郎さんのところの演奏会、4月に歌舞伎座であるんですけども、ここは子どもに焦点を当てたんですって、1つは。

○杵屋氏 うちの杵勝会という流派なんですけれども、そこでは3～4年に1回大きい劇場、例えば京都の南座とか博多座とかで大きい会をさせていただくんですけども、全国からお子様、3歳から高校生ぐらいのお様が無料で、長唄を舞台で唄であり、三味線なりお囃子なり経験できるという場を設けております。

それだけだとただ子どもがやっているということだけになってしまうので、今の清響会、青年が一生懸命やっているという舞台を実際にお子さんに見てもらって、一生懸命やると、やっぱりある程度三味線が弾けるようになる、声も出て楽器も演奏ができるという機会を持ってほしいということで、今度の4月27、28で東京の歌舞伎座で2日間にわたって、全国から100人ぐらい子どもがもう本当に長唄が初めてのお子さんとかがたくさん出演します。

○葛西氏 これも企画なんです。彼らは青年団というグループです。そうじゃなくて子どもたち、それも平仮名の長唄のこういうのを唄方も含めてやる。

やっぱりこれも演奏者の後継者育成だけではなくて、関心を持ってもらうことと観客層も若返ってほしい。知っている人ばかりではない、今日初めての冗談で言った73人もそうですけども、聴いたか聴かないかの差なんですけれど、こうやっていると企画に取り組んでいます。

ただし、味見さん、歌詞は難しいね。

○味見氏 そうですね、事前によく調べれば情景描写なりというのがすごくわかりやすいんですけども、いきなり聴いて、古文を急に歌っているようなものなので、事前に少し知識を入れておくと、より深く楽しめる音楽なのではないかと思います。

○葛西氏 江戸時代は誰もが親しんだ音楽、流行歌なんて言っているけれども、古典なんですね。だから、私は決して古典、伝統音楽は簡単なんて言いません、難しいんです。難しいからおもしろいんですよ。難しいから何だろうと思って、次がある。次があったら、また次がある、奥が深い。歌っているほうも発見があるでしょう。

○味見氏 そうですね、やはりただ節を追うだけでなく、ちゃんと歌詞を考えて歌うように指導したり、

学生にはそういうふうにしておりますので、全然演奏のクオリティーが変わってくるんです。

○葛西氏 忠次郎さん、とはいっても、今調べてもわからない言葉が結構あるんでしょう。

○松永氏 そうですね、もう名詞なんかでもわからないことはたくさんありますし、あと意味がもう全然、何でこの言葉がここに来ているのかというのがありますけれども。

○葛西氏 ただ、間違っただけで伝承されている場合もあるんですね。だから、そんなことを細かく掘り下げる研究者もいるけれども、そうじゃなくて、私いつもこう言うの、観客に。難しい言葉は必ず出てきます、出てきたら飛ばしてくださいと。それが一番なの。次、行けないから。皆さん、歌詞こだわったりするじゃないですか、そういうことをしない。それは楽しむことにならない。だから、飛ばす喜び、それも必要だと思う。

そして、もう一つ、やっぱりある程度、解説は必要でしょう。

○杵屋氏 そうですね、やっぱりそれがないとわからないまま。それはそれで楽しめる方もいらっしゃると思いますが、やっぱり意味がわからないという方のほうが多いですね。

○葛西氏 でも、何もわからなくても楽しめるものなんですよ、音としてね。意味よりは楽器の音色を楽しむ、そういう音楽の楽しみ方もありますけれども、日本の伝統文化だから、少なくとも登場人物や情景とかそういうのを少し把握すると近寄れる。近寄れると一緒にになれる。一緒にになれると拍手が違うでしょう。お客の興奮度は。何か経験ありますか。

○杵屋氏 そうですね、やっぱり拍手がすごく長いとか大きいとかということはこちらも手ごたえがちゃんという演奏した後にはやっぱりそういうのが。

○葛西氏 唄はまた歌いどころというのがあって、いい声出すようになっているんですよ。

○杵屋氏 主にタテの人がいいところを歌うことにはなっているんですけども、やっぱりそういう唄の聴かせどころというのが長唄には何か所か、ゆっくりなところなんですけれども、ちゃんと用意されている。

○葛西氏 必ず用意されている。

三味線は得だよ、必ず拍手起きるものね。得だよという言い方変ですけど、これはもう演奏家としては冥利に尽きるでしょう、長唄はよくできているでしょう、聴かせどころ。

○杵屋氏 お客さんで、拍手果たしていいものかという、しんとしているところで拍手をしていいのかという方もいらっしゃるんですけども、やっぱりそれを超越して拍手が来るときがあるので、そういうときはやっぱり弾きながら鳥肌が立つような状態になることはあります。

○葛西氏 ただ、それだけ超絶な技巧が必要とされる場面でしょう。

○杵屋氏 そうですね、特に1人で弾くのではなくて大勢で弾いているとき。1人で弾くときの拍手というのは比較的多いんですけども、大勢で弾いているときの拍手というのはなかなかいただけないの

で、それはやっぱり個人ではなくて演奏自体が盛り上がっているということなので、そういうときの拍手というのはやっぱりうれしいですね。

○葛西氏 さあ、それでは、今度はお囃子のほうの解説にまいりましょう。

じゃ、何かからしましょうか、お囃子。楽器がいろいろあるんだけど、さっき皆さん見ていただいたのは一番向こう、これはまだ見ていないか。鼓が一番一般的なのかな。さっき見た楽器。

○福原氏 表に出ていたのが真ん中に2つ並んでいる、これは大小の大鼓と小鼓。見たまま向こう下手側が大鼓で、上手側が小鼓ということになります。形状はほぼ同じなんですけど、全然違う音が出ます。

○葛西氏 小鼓から。

○福原氏 これは日本の打楽器の代表といってもいいと思うんですが、お正月なんかにもよく聴くポンという音が出る楽器ですね。演奏スタイルもおもしろいですね、肩に担いで演奏しますね。

○葛西氏 肩に担ぎます。

○福原氏 ちょっと音を出してください。

(小鼓実演)

○福原氏 今、ちょっとかたいタツという音とポンという音と出ていますけれども、基本はその2種類の音を打ち分けるんですが、左手で締めたり開いたりして、それで音を変えるんですね。

○葛西氏 これを締めると、これが実は調音、音を整えているんです。皆さん、これ飾りじゃないんですよ。締めるとどうなるの。

○福原氏 締めるとやっぱり締まるので、タツという音が出ます。

○葛西氏 これ音が実は演奏会場で聴こえるんですよ、締めるときの音。ちょっと締めてみて。

(小鼓締める)

○福原氏 ちょっとキリキリなんて音がするんですけどもね。

○葛西氏 キリキリとこの音が音楽なんです。いや、本当ですよ。しんとした中でキリキリとなると両方の皮が張るんです。張ると。

(小鼓実演)

○福原氏 タツという音ですね。じゃ、だんだん打ちながらタツタツと。

(小鼓実演)

○福原氏 甲(かん)と乙(おつ)というんですけど、締める音のことを甲の音、開く音を乙の音というんですが、基本その2種類を打ち分けております。

○葛西氏 さあ、ここで皆さん質問があるはずですよ。必ず見ていた人、あれ何やっていたんだろう。どうぞ、質問してください、小鼓について。なかった？

(受講生より質問)

何かこうやっていたよね、口の周りで。これは何をやっているのか、本人に。

○清響会 皮に湿気を与えて鳴るように。

○葛西氏 皮に湿気を与えているんです。ちょっと湿気与えてください。

今、はあと言っている。わかる。湿気を与えて、そして裏見せてください、皆さんに。何、これ。

○清響会 調子紙と言って和紙です。

○葛西氏 和紙にはあとやるだけじゃなくて、さっき何かやっていた。やって。

これをやるんです。これで音を整えるという不思議な楽器なんです。乾燥はだめなの。

○福原氏 さようございます。

○葛西氏 では、次、いきましょう。

○福原氏 その隣は逆に乾燥を好む楽器なんですけど、大鼓。皮も胴も材質は同じで小鼓と。胴は桜を使っています、皮は馬なんですね、両方とも小鼓も。

では、ちょっと音を聴いていただきます。

(大鼓実演)

○葛西氏 馬なんですけど、使っている皮の部位が違うんですね。

○福原氏 このように非常に乾いた調子の高い音がします。

○葛西氏 質問、大鼓に対して、何。何もない？

(受講生より質問)

○葛西氏 いい質問、これだよ。やっぱり観察している。見せて、ちゃんと。けがしたの、これ。

○清響会 いや、違います。

○葛西氏 バンドエイドじゃないんです。何、これ。

○清響会 これは実は和紙を指に張りまして、米を潰したのりでどンドン張り重ねていつつくったものですよ。

○葛西氏 おなかすいたら食べられる。

○清響会 食べられます。

○葛西氏 本当ですよ。米ののりでかちんかちんにして、抜ける。すぽんと抜けるんです。ところが、ちょっとどこか当ててみて。こんなかたい音がする。これで打つんですね。かんかんになっています。どうやって乾燥させるんですか。

○清響会 本番の2時間ぐらい前から火であぶります。

○葛西氏 あぶっているんです、本当ですよ。あぶってかんかんにするから、逆に湿気が。

○清響会 嫌いです。湿気を好まない楽器です。

○葛西氏 だから、梅雨の時期には演奏しない。というわけにはいかないから…。という湿気を好む楽器と乾燥を好む楽器が大小の違い。おもしろいですね。

そして、あとは。

○福原氏 その向こうにありますのがいわゆる太鼓でございますね。これもやっぱり能で使っている楽器と同じなんです、これも舞台に出て演奏する場合があります。縮太鼓というふうに、太鼓という種類がたくさんありますので、それを限定するために縮太鼓と言ったりもします。

○葛西氏 これも太鼓ですけどね、あれは締めている。縄がひもがかかっていますね、オレンジの。これがぎゅっと締めているので、縮太鼓。いろんな楽器があるんです、縮太鼓。これは道具を使います。さっきは指だけでしたけど。

○福原氏 バチを使います。こういうふうに太いバチと細いバチを使い分けて、いろんな演奏をしておりますね。太いバチは能で使っているバチと同じなんです、割合ぶぼったようなかたい演奏をしますが、細いバチはこの辺の関東なんかでよく聴かれるような祭り囃子なんかで使っているバチと同じで、ああいう非常に軽妙な演奏をいたします。

○葛西氏 さっきの鼓と違って握ったりはしないので、これでは変えられないからバチで変えるという。音出せますか、これで。ちょっと打ちにくいでしょうけど。形を見てください、打つ形を。

(太鼓実演)

○福原氏 今、型を見てもわかるように、こんなやっぱり形もちょっとかたいですよ。やはり武家で何ていいますか、発展した能楽から来ているということもあると思いますが、これが細バチになりますと急に砕けます。こんな感じ、くつろいじゃうんですが。

(太鼓実演)

○福原氏 こんな感じになります。

○葛西氏 バチによって打ち方によって、同じ縮太鼓でも音が違う。

○福原氏 随分感じが違いますね。

じゃ、太鼓のほう、もう一つ、あれは大太鼓ですが、ふだん歌舞伎なんかの黒御簾にあるのはもっと大きくて胴が長いものなんです、今回はちょっとこの後の演奏で使うために小型のものを平太鼓を持ってきました。

○葛西氏 この後で使います。本当はこれぐらい。

○福原氏 そうですね、胴の長さもこれぐらいはある大きなもの。

○葛西氏 これは会館によって備えているところありますか。

○福原氏 もうほぼどの会館にも大体大太鼓はあるんですが、やっぱりまれにないところがあるんですが、

そういう場合はしようがなくして借りるんですね。

○葛西氏 経費がかかりますから、ぜひ置いておいてほしいですね。

○福原氏 さようでございます。置いておいてほしいです。

○葛西氏 このいろんなバチが違いますね。どうぞ、使い分けてみてください。

○福原氏 独特なのが一番こっちにある何か巨大なお箸のようなバチですけど。

○葛西氏 菜箸みたいな。

○福原氏 これは長バチと申しまして、歌舞伎の大太鼓独特とっていいバチです。これで先ほどの佃のよ  
うな自然描写をよくするんですが、波の音を聴いていただきましょう。

○葛西氏 波の音、どこの波でしょうか。

○福原氏 磯に打ち寄せるような。

○葛西氏 海の波。想像です。

(太鼓実演)

○福原氏 寄せて砕けるというような、そんなようなのを表現しております。

○葛西氏 ザブーンと言っているんですね、水着着たくなつたでしょう。  
次です。

○福原氏 もう一つ、おもしろいのは雪ばいと我々呼んでいますが……

○葛西氏 これは何でできているんだろうな。

○福原氏 ちょっとやわらかくなっていますね。

○葛西氏 やわらかいものですね。雪ばいというんですね。

○福原氏 名前のおり、雪の降る様子をあらわす、雪音というのに使うんですが。

○葛西氏 今日出てきますから、この音が聞こえたら雪が降っている、想像してください。雪に音なんか  
いんだけど、日本の音楽では音があるんです。

(太鼓実演)

○福原氏 これはしんしんと雪が降っているという様子ですかね。

○葛西氏 しんしんだから音がないんだけど、音がある。

三味線でもあるんですね、雪の音は。雪の手。出てきます。

音がないものに音をつける、だからその情景が見えてくるという日本人の置きかえなんですね。  
雪ばいでした。

もう一つ、何かバチがあった。

○福原氏 これは檜の木でできた檜バチ。これはよく大太鼓で使う、どのジャンルでもよく使うような太い  
檜バチというものです。



(太鼓実演)

○福原氏 普通にドンという音になりますね、これは。

歌舞伎はそのバチをいろいろ使い分けて、いろんなシーンを演出するということになります。

○葛西氏 そして、太鼓類、小鼓、大鼓、みんな鼓という字、みんな鼓です。こっちは大きい鼓、太い鼓、小さい鼓、大きい鼓ですが、ここに何か金属のものがああります。どうぞ。

○福原氏 当たり鉦とオルゴールという名前です。

○葛西氏 オルゴールというのがあるんです、これ。

○福原氏 まず、当り鉦（あたりがね）です。これはもうお祭りの囃子で使っているものです。関東の祭りには必ず使うんです。この鉦と締太鼓と大胴（おおどう）という小さな大太鼓と、あと笛というのが江戸の囃子のセットなんですけど、ちょっと打ってみてください。

(当り鉦実演)

○福原氏 チッチャンチャチャチキ、チチャチャンチャチャチキというチャンチキなんて言ったりする場所もありますけれども、こういう鉦の楽器も使っております。

オルゴールというのは、これは見ていただくと何だろうと思われると思うんですが、実はちょっと1つだけ、ポンと打って。

(オルゴール実演)

○福原氏 これにポクポクとかがああります。

○葛西氏 仏壇にあるでしょう、りん。

○福原氏 りんでございます。罰当たりな、りんを楽器に使っているんですが、大きさの違うりんを幾つか並べて楽器としているんですね。あれを打ちますと、非常にきらきらしたきれいな音になるんですが。

○葛西氏 きらきらメロディーなんです。ちょっとやって。

(オルゴール実演)

○福原氏 こんな感じでございますね。

○葛西氏 ゆめゆめしいでしょう。どんなとき使うんですか。

○福原氏 例えばよく使うのは蝶が差金で出てまいりまして、蝶の飛んでいるシーンなんかで風の音とオルゴールとかそんな。

○葛西氏 菜の花に蝶が飛んでいる風景、春の景色の中にこの音が流れてくるとゆめゆめしいですよ。えっこんな音ありというカラフルになっている、音が。

というようなので、大体紹介したのかな。

それで、あとは寛さんの本業がある。

- 福原氏 笛でございますね。笛は我々三味線音楽の笛吹きは2種類の笛を持っています。
- 葛西氏 あんないっぱい持っているんです。
- 福原氏 今日はありったけ持ってきていただいたわけではなく、大体あのぐらい持ち歩くんです。
- 葛西氏 ふだんから持ち歩くんです。  
違いは何ですか。
- 福原氏 違いは2種類あるんですが、その片方の篠笛というのは……
- 葛西氏 篠笛を1本手にとって。見れば明らかにわかる、これがお祭りなんかで使う篠笛で、もう一本が、両方比べて持ってみてください。
- 福原氏 これは能管といいます。
- 葛西氏 同じ笛で、笛といっても違うんです。お能で使う、つまり歴史が古いほうは左のほうですね。右側は庶民の笛です。
- 福原氏 そうですね。  
あれだけ数があるのは篠笛のほうで、サイズが違うわけです、見たまま。長い笛になれば低い音域、短い笛になれば高い音域を演奏するという、これは三味線のお調子に合わせて運指を変えないで笛自体を持ちかえて演奏するというそういう演奏方法をしております。唄が歌えるメロディー楽器といいますか。  
それに対して能管のほうはあの規格、あのサイズしかないんです。長い能管というのは存在しなくて、それで演奏の仕方もメロディーを吹くのではなく、非常に抽象的な演奏の仕方をしておりまして、手組といって音の幾つかの固まりに名前をつけたりしておりまして、それでいろんなものを抽象的に表現していくような、擬音笛というと薄っぺらなんですけど、非常に精神的な擬音笛というようなそんな感じの扱いをしております。
- 葛西氏 皆さん、間もなくお雛様ですね。お雛様に五人囃子とあるでしょう。あの五人囃子は皆さんにばらばらにしちゃうと、道具がどれだかわからなくなる。それはみんなここにあるんです。この中央の2つ、大小の鼓、そして太鼓、この3つにそして笛でこれが四拍子といって、能楽で使われていた楽器です。だから、五人囃子はこの4種類を使うんです。もちろん順番は能と同じ並び方ですね、伝統楽器ですね。だから、それさえわかれば道具の並び方がわかるわけです。  
じゃ、五人囃子のあと一人は何というのと。
- 福原氏 お扇子を持っている人がいるはずなんですけど、お謡（うたい）の人なんですね。
- 葛西氏 皆さん、その伝統がさっき気づきましたか。唄の人に対して質問ある人。  
(受講生より質問)
- 葛西氏 よく見ていらっしやった。私もあれ見てえっと思ったのは、いいですか、唄方は歌うときに。

○味見氏 お扇子を男性の方はこういうふう持って歌います。

○葛西氏 ここに置いてあるんですね。

○味見氏 そうです、下に置いてあるものを手にとって歌います。歌い終わると置きます。

○葛西氏 今の質問の答えは。

○味見氏 女性の方は両手で持ちまして、男性は片手で持ちます。

○葛西氏 男女の違いですね。

合唱している場合に、1人が歌うときは持った人が歌うという。

途中、あれアラームの合図でもあるんでしょう。ちょっともうできなくなっちゃったとか。

○味見氏 そうですね、まれになんですけれども、ほとんどないんですけれども、ちょっとトラブルがあった場合は置くと、誰かが必ず持って歌うということで約束されております。

○葛西氏 うまいぐあいにできている。つまり、楽器の方だけが持っているんじゃないくて、道具を必ず使うということですが、忠次郎さん、扇子の意味は伝統芸能ではどうだと思っていらっしゃる。

○松永氏 意味ですか。

○葛西氏 意味というか、だって持って出るということは。

これも日本の伝統文化です。必ずお茶でもお花でも扇子、日本舞踊もそうですけど、大切なものなんでしょう。

○松永氏 刀ということですか。

○葛西氏 いや、わからない、忠次郎さんの考え方。

○松永氏 僕らは扇子を持たないと、何か歌うということはちょっとできないぐらいな感覚になっていますね。

○葛西氏 つまり、お稽古の一步から扇というものは持っているものなんですね。つまり、あることによって一般の方もそうですが、人様のお宅行ってお挨拶するときも必ず置きますよね、結界という意味もありますけれども、それだけじゃなくて、こういう伝統芸能の人にとっては魂という意味もあるわけで、すごく大切にしているので、一つ一つに全部意味があるということです。

楽器もそうです。みんなこの楽器を手荒に扱ってはいけないのは何でも同じ、さっきの屏風もそうですけどね。

お笛の音を出していただいたほうがいいね、ちょっとだけ、ごめんなさい。

○福原氏 すみません、先ほどのような感じで扱うんですけれども、……

○葛西氏 能管、ちょっと吹いていただこう。

(笛実演)

○福原氏 こんなような感じでございますね。

○葛西氏 能の音とさっきの三味線の音と同じように不完全な音なんですよね。

○福原氏 非常にやはりさわりがきつく、混じった音が出ておりまして、いわゆる音階感とか音程感みたいなものをほぼ感じないような音、実は出ているんです。ですので、三味線がどんな調子であろうと、あの笛を使って運指も変えないんですね。普通だったらあり得ないんですけども、それで成立するという事は、そういう自然の音のようなさわりの強い音が出ているということでございますね。

○葛西氏 さわりという言葉が、これも日本文化なんです。清らかじゃなくてさわるといのはいろんな差しさわりがあるのさわりでもあるし、触れるということでもあるんですが、これが日本の文化、1足す1は2じゃないという割り切れない音です。なぜか、あの笛の中にもう一本、管が入っている、それで音を崩しちゃっているんですね。そういう実に普通のこうやって透き通る篠笛とは違う、これが日本の音なんです。

ということで、皆さんに拍手をどうぞ。この後、活躍します。ありがとうございました。

いやいや、こういうことをやっても楽しいですよ。皆さん、企画の参考ヒント、こういう音だってまだまだいっぱいあるんですよ。その後で何か具体的に、今日は演奏ですけども、日本舞踊や歌舞伎やある場面の再現をこれ音だけでも立体的にできるし、皆さんもいろいろやっていらっしゃるだろうけど、唄方としてもこの総合的な日本の音のおもしろさ。

○味見氏 総合的、やっぱりこのユニットといいますか、本当に長唄に関していいですよ、お囃子から唄から三味線から全部そろっていい固まりの音が出るということなので、単体でもよいんですけども、よりダイナミックな音が出たり、楽しめるのはこれぐらいの人数がいたほうがいいのかと思います。

○葛西氏 今日は皆さん、客席のほうがプロなんです。いいですか、皆さんのことを企画立案するプロです。皆さんに向かって、ぜひ今日の研修が実りのあるために、一言ずつ締めくくりのお言葉を忠次郎さんからお願いしたいと思います。お願いでもいいですし、希望でもいいです。

○松永氏 やはり日本の古典芸能といいますのは、最近ではジャパンカルチャーとか言われて海外の方からすごく興味を持たれたりしていると思うんですけども、そうやって今、日本のアニメだとか音楽だとかがすごく世界で興味を持たれるということのやはり源流として600年とか500年、400年前からずっと脈々と伝わってきた古典芸能があったから、今そうやって何か1本筋の通ったカルチャーというものができ上がって、世界の人にも好まれているのかなという思いがしますので、ぜひその源流の水の栓を閉めることなく、日本の古典芸能はずっと代々伝えていって、なくなるということほしくないでほしいなと思っております。

○葛西氏 そのために皆さんが蛇口を広げて、そのコップに受けとめて飲んでください。それが皆さんの希

望です。

では、寛さん。

○福原氏 今日ありがとうございます。

我々もいろんなどんどんこれからもそうですし、発信をしていかなきゃいけないというふうに常々思っておりまして、その発信の仕方なんかも工夫をいろいろして、今までどおりただ長唄をそのままお聴きいただくというだけじゃなく、先ほどから葛西先生がおっしゃっているように、少しそこへいわゆる説明のようなレクチャーのようなものをしたり、あるいは先ほども囃子だけでなんという話もしましたけれども、そういうふうに何か舞台のこちら側もいろいろ工夫をしなきゃいけないと思っているんですね。

ただ、やはりそこで私が一番大事だと思っているのは、伝統音楽の様式をちゃんと踏まえたものでなければいけないと思っているんです。それが崩れてしまったものはただ楽器を使うだけということになってしまいますので、そういう様式を踏まえた楽曲であったり、あるいは演奏の仕方、見ていただき方というところが肝だと思っております、そこを我々も大事にしなきゃいけないと思ひますし、聴いていただく皆さんですとか、あるいは企画をしていただく方たちにもそこを一つ大切にいただけると、忠次郎さんがおっしゃったようなことがそのまま続いていくというふうに思っております。

○葛西氏 親しみやすさでジーンズでもできるし、アロハシャツでもできるんです。でも、今日幕が開いたときに、あの若者たちの苦労を見たときにはっとなさったと思う。これが日本の美ですよ、それから精神性ですね。だからあくまでも古典に帰るということを念頭に置きながら、自由性を保ちたいという寛さんの願いでした。

○杵屋氏 昔の長唄がはやっていた時代とは違って、今はやっぱりただ長唄を演奏しているだけでは言葉がわからない、長過ぎる、もちろん古典の演奏というのも大事なんですけれども、その見せ方というのを僕らが考えていかなきゃいけない時代に来ていると思います。

そして、各劇場に合ったそれぞれのシチュエーションを僕らが考えてどういう見せ方をするか、お客さんがどういうことをすれば喜ぶ。それともう一つ、地方の地元の方、さっきも言いました地元のお子様、もちろん地元のあれでもいいですから、参加していただくということ、日本の音楽に触れてもらうこと、それがもうこれからはすごく大事になってくると思いますので、うちの劇場はこういう特質がある、こういうものがあるということをしていただいたら、それに合った演奏方法、演奏の仕方、今、寛さんがおっしゃったように古典を崩さないでその見せ方、あと演奏も一流でなきゃいけないと思いますので、その辺を踏まえてぜひ皆さんがちょっと考えていただきたいと思ひます。

○葛西氏 作品として皆さんの土地の文化と融合する作品、あるいは土地出身の方のモデルの作品といろいろあるんです。創作もできるということです。ご当地のものもぜひ長唄でつくってください。

○味見氏 我々は演奏する若者を育てる役割だと思うんですけども、ぜひ皆様のほうで聴くほうのお客様を聴く耳を持ったお客様が開拓できるようにと申しますか、やっけていただいて、聴く耳を本当に持っていたいただければ演奏が悪いとかいいとかということも批判もしていただけたらと思うので、ただありがたがって聴くだけにならないように厳しい耳を持っていただければと思います。

○葛西氏 皆さんの胸にわだかまっている声が聞こえます。いいのはわかるけど、採算がなと思っていらっしやるでしょう。それは皆さんも同じように思っているんです。それは要ご相談でございます。

○葛西氏 では、生演奏を楽しんでくださいね。

長唄とは何と聞かれて、私いつも長い唄ですと言うんです。長いんです、歌舞伎だから40分、50分あるけど。でも、これから聴いていただくのは全部ええとこどり、みんな2分ぐらい、3分ぐらいのそれも一番演奏や唄でいいところを組み合わせると5曲取りそろえました。

そして、日本の文化の楽しいところというか、わくわく感は春夏秋冬があることです。だから、この長唄の抄曲集というのは春、夏、秋、冬に季節を分けて、皆様にこの後お楽しみいただく構成になっています。タイトルを見てもぴんと来ないかもわかりませんが、曲目の順番から行きますと、最初は「元禄花見踊」です。江戸時代じゃないんですよ、これ明治時代につくられたの。でも、みんな知っています。チャンチャチャン、チャチャチャチャンとこういうメロディーがある「元禄花見踊」、これ歌詞なんて想像しなくていいです。春らんまんの春の桜を楽しんでいて、元禄時代に戻った、花見踊りを楽しんでいるとこんな春の雰囲気を三味線と唄で楽しんでいただく。

次は、夏です。アヤメ、5月、初夏ですよ。だから、アヤメ、堀切菖蒲園とあるでしょう。堀切とあるんだけど、これもあなたが大好きだという腕に彫り物を彫って切るとそういう言葉に引っかかっているんです。そんな考えなくていいです。大体、男女の恋が中心になっているんですが、「菖蒲浴衣」はむしろ季節感と、そして浴衣を着る季節、夏です。

そして、次、「五色の糸」、これは七夕様です。七夕は夏じゃないの、いえ、秋なんです。皆さん、江戸の芸能を鑑賞するためには基礎知識、1月、2月、3月が春です。4月、5月、6月が夏です。7月から秋なんです。7月7日は初秋の七夕。「五色の糸」は「五色の短冊」ですよ。だから、5色の色、5色の色はオリンピックの色ではありません。これは五行思想ですから、白と黒と赤と黄色とそして青ですね。青は春、青春ですね。この色が「五色の糸」。これも字がうまくなりますようにとかという短冊に歌を書いたりする、そしてカジの葉の上を書いたみたいな伝説、これも日本の文化です。

そして、冬が「鷺娘」。真っ白な雪の中に花嫁衣装が真っ白で、そこにたたずむ娘がサギの精だとそんなこと考えなくていいです。雪がさっきの雪です、降ってきますからね、雪の中に白い衣装を着た女性が恋のためにたたずんでいる、そんなことを想像してください。

最後が「鏡獅子」、これお正月です。鏡というのは鏡餅じゃありません。お鏡曳きという江戸城のお正月の行事で獅子が髪をなびかせるでしょう。これ明治時代につくられた曲ですよ、江戸時代じゃありません。なぜ、江戸城を舞台にした物語を書いても問題にならなかったから。勘九郎さん、勘三郎さんの「鏡獅子」も有名ですけども、最後の勇壮に獅子が毛を振るところの華やかな華やかなところだけですから、何にもこれ歌詞のことなんかは考えずに、また歌詞を見ずに音を楽しみ、彼ら若者たちのさっきの日本の演奏がこれが季節感がそれぞれ出てきます。どうぞ舞台の照明の変化とともに楽しみください。

長唄抄曲集です。

(「抄曲集」演奏)

○柴田氏 これをもちまして「企画立案と若手人材の活用」の講座を終了いたします。

お手元にアンケートがございますので、ご記入の上、受付スタッフ係員にお渡しくださいませ。  
本日はご参加いただきまことにありがとうございました。